

特233
972



始



4233

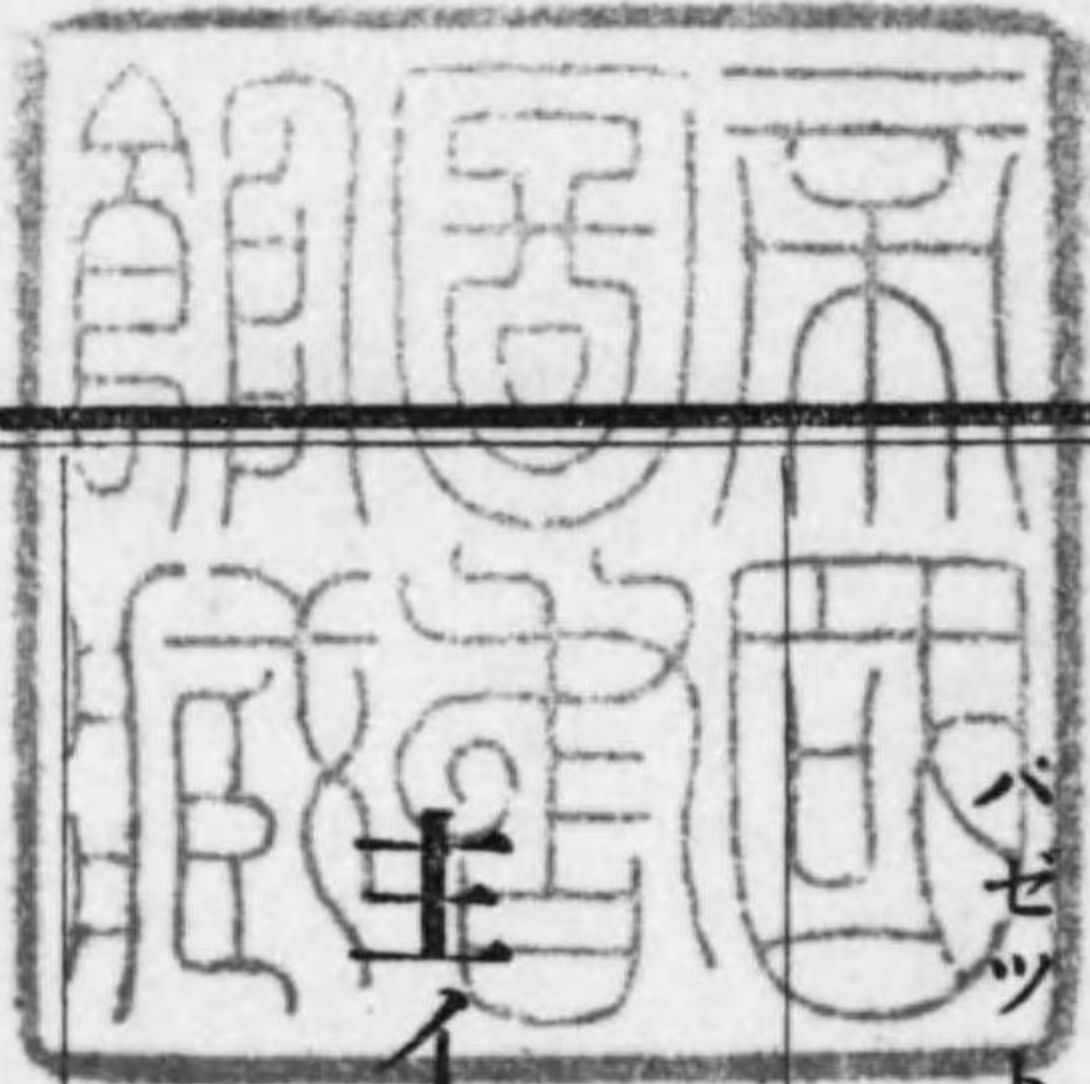
972

パゼット・ウィルクス著

主イエスの個人的會談

CHRIST'S
PERSONAL INTERVIEWS,
BY
A. PACET WILKES, B. A.

特233
972



バゼット・ウイルクス著

主イエスの個人的會談

日本傳道隊聖書學會出版部發行



主イエスの個人的會談

目次

- 第一、主イエスと富める宰たる青年……………一
- 第二、主イエスと税吏の長ザアカイ……………二一
- 第三、主イエスと惡をなせる婦……………三一
- 第四、主イエスと捕へられ訴へられたる淫婦……………四五
- 第五、主イエスとパリサイ人の宰ニコデモ……………五九
- 第六、主イエスとサマリヤの賤婦……………七五
- 第七、主イエスと十字架上の盜人……………九三



主イエスの個人的會談

バゼット・ウィルクス著

緒言

主イエス・キリストが御在世中、その貴重なる時間を一個人との對談に費し給ふた事は尠くない。特別に四福音書に記されてある數ケの例をあげると、各々その性質を異にして居り、それによつて豊かなる眞理と教訓とを得る事が出来る。今茲にその要點と概略を指摘して研究することゝし様、其物語と云ふのは

一、主イエスと富める幸たる青年

罪の確認（ルカ十八〇十八―廿四）

- 二、主イエスと税史の長ザアカイ
生命に至る悔改（ルカ十九〇一十）
 - 三、主イエスと悪をなせる婦人
碎けたる心（ルカ七〇卅六一五〇）
 - 四、主イエスと捕へられ訴へられたる淫婦
罪の赦（ヨネ八八〇一十二）
 - 五、主イエスとパリサイ人の宰ニコデモ
魂の更生（ヨハネ三〇一廿一）
 - 六、主イエスとサマリヤの賤婦
聖靈の賜物（ヨハネ四〇一四二）
 - 七、主イエスと十字架上の罪人
臨終の平安（ルカ廿三〇卅二一四三）
- の七つである。

第一、主イエスと富める宰たる青年

『題目』 罪の確認

或司、問ひて言ふ「善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか」イエス言ひ給ふ「なにゆゑ我を善しと言ふか、神ひとり他に善き者なし。誠命は、なんぢが知る所なり」「姦淫するなかれ」「殺すなかれ」「盗むなかれ」「偽證を立つる勿れ」「なんぢの父と母とを敬へ」「彼いふ『われ幼き時より皆これを守れり』、イエス之をきゝて言ひたまふ『なんぢなほ足らぬこと一つあり、汝の有てる物を、ことごとく賣りて貧しき者に分ち與へよ、然らば財寶を天に得ん。かつ來りて我に従へ』、彼は之をきゝて甚く悲しめり、大に富める者なればなり。イエス之を見て言ひたまふ『富める者の神の國に入るは如何に難いかな』

(ルカ傳十八〇十八—廿四)

研究すべき五の要點

一、この富める宰たる青年の出て來る前のルカ傳十八章一節より十七節にある三の物

語との對照

一、寡婦

また彼らに落膽せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言ひ給ふ、「或町に神を畏れず、人を顧みぬ裁判人あり。その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたまへ」と言ふ。かれ久しく聴き入れざりしが、其のち心の中に言ふ「われ神を畏れず、人を顧みねど、此の寡婦われを煩はせば、我かれが爲に審かん、然らずば絶えず來りて我を惱さん」と」主いひ給ふ「不義なる裁判人の言ふことを聴け、まして神は夜晝よばはる選民のために、縦ひ遅くとも遂に審き給はざらんや。我なんぢに告ぐ、速かに審き給はん。されど人の子の來るとき地上に信仰を見んや」(十八〇—一八)

金なく頼なき寡婦は切なる願によつてその願は聞き入れられた。主イエスはこの話によつて、神の救を受くべき者の第一の資格を示し給ふた。

二、罪深き不義なる取税人

また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに此の譬を言ひたまふ、「二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、ひとり取税人なり。パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪、不義、姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。我は一週のうちに二度断食し、凡て得るもの十分の一を獻ぐ」然るに取税人は遙に立ちて目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ「神よ罪人なる我を憫みたまへ」われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おほよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるゝなり」(十八〇九—十四)

罪深き不義なる取税人は碎けたる心にて來り、自らの罪人なるを告白し憐れを求めた

る故に救はれた。主イエスはこれによつて、神の救を受くべき者の第二の資格を示し給ふた。

三、幼児

イエスの觸り給はんことを望みて、人々嬰兒らを連れ來りしに、弟子たち之を見て禁められたばイエス幼児らと呼びよせて言ひたまふ「幼児らの我に來るを許して止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。われ誠に汝らに告ぐ、おほよそ幼児のごとくに、神の國をうくる者ならずば、之に入るに能はず」(十八〇十四—十七)

無能無力にして自ら立つ能はぬ幼児、母に依繼り單純なる信仰と信頼をもつて安じてゐる幼児によつて、主イエスは天國の市民たる資格、永生を受くべき第三の資格を示し給ふた。

今この三の物語を富める宰たる青年と比較対照すると、

- 一、青年は『富める者』であつた（廿三節）
寡婦は『貧しき者』であつた（三節）
- 二、青年は『義しき者』であつた（廿一節）
取税人は『罪人』であつた（十三節）
- 三、青年は『宰たる者』であつた（十八節）
幼児は『嬰兒』であつた（十五節）

思ふにこの青年は主イエスの三の説話を拜聴してゐたであらう、然してその三の説話が一つも自分に適合せない爲尙イエスの教を聞かんとして來たのであらう。

二『なほ足らぬ事一つあり』

主はこの青年に『なんぢなほ足らぬこと一つあり』と曰ふた。これによつて彼がなさざりし手拔けの罪を指摘し給ふた。今試みに之と同意味の主イエスの警戒の言を探ると、

【一】 マタイ傳廿五章四十一節—四十六節

『斯てまた左にをる者どもに言はん「誚はれたる者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備へられたる永遠の火に入れ。なんぢら我が飢ゑしときに食はせず、渴きしときに飲ませず、旅人なりしときに宿らせず、病みまた獄に在りしときに訪はざればなり」爰に彼らも答へて言はん「主よ、いつ汝の飢ゑ、或は渴き、或は旅人、あるひは裸、あるひは病み、或は獄に在りしを見て事へざりし」こゝに王こたへて言はん「誠になんぢに告ぐ、此等のいと小きものゝ一人に爲さざりしは、即ち我になさざりしなり」と。斯て、これらの者は去りて永遠の刑罪にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』

茲に罰せられた罪人の地獄に送られし理由は、爲すべき事をなさなかつた爲である

【二】 ルカ傳七章十四節—四十六節

斯て女の方に振向きてシモンに言ひ給ふ「この女を見るか。我なんぢの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へず、此の女は涙にて我が足を濡し、頭髮にて拭へり。なんぢは我に接吻せず。此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず」

茲に主イエスはシモンに「汝はわれに足の水を與へず——接吻せず——油を抹らず」と曰ふてその罪を指摘し給ふた。彼の罪はなすべき事をなさなかつた爲である。

【三】 ルカ傳十六章十九節—卅一節

或る富める人あり、紫色の衣と細布とを著て、日々奢り樂しめり。又ラザロといふ貧しき者あり、腫物にて腫れたゞれ、富める人の門に置かれ、その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ。而して犬ども來りて其の腫物を舐れり。遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携へられてアブラハムの懷裏に入れり。富める人もまた死に葬られしが、黄泉にて苦惱の中より目を舉げて遂にアブラハムと其の懷裏にをるラザロとを見る。乃ち呼びて言ふ「父アブラハムよ、我を憫みて、ラザ

ロを遣し、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給へ、我はこの焔のなかに悶ゆるなり」アブラハム言ふ「子よ、憶へ、なんぢは生ける間、なんぢの善き物を受け、ラザロは惡しき物を受けたり。今こゝにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。然のみならず此處より汝らに渡り往かんとすとも得ず、其處より我らに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵定めおかれり」富める人また言ふ「さらば父よ、願くば我が父の家にラザロを遣したまへ。我に五人の兄弟あり、この苦痛のところに來らぬやう、彼らに證せしめ給へ」アブラハム言ふ「彼等にはモーセと預言者とあり、之に聽くべし」富める人いふ「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改めん」アブラハム言ふ「もしモーセと預言者とに聽かずば、たとひ死人の中より甦へる者ありとも、其の勸を納れざるべし」

茲にある富める者の地獄に墜りし理由は、彼が心を閉ちて爲すべきことをなさなかつた爲である。

三、青年の誤解

この青年は四つの根本的の誤解をしてゐた。即ち彼は、

【一】『善き師よ』

善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか（十八節）

彼は主イエスを『神たる救主よ』といつて信すべきであるにかゝはらず『善き師よ』といひ、救はるゝ事を願はず今少し教へらるればよしと思ひ、自分の智によりたのんだ。

【二】『何をなすべきか』

『善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか』（十八節）

永生は神よりの賜物である。故にこれは信仰によつてうべきものであつて、人間の行爲によつて得られるものでない。然るに彼は『われ何をなして』といひ、彼自

らの行爲によつて得らるゝと思つた。彼は自己に依頼んだ。

【三】『自己の義』

『彼いふ、われ幼き時より皆これを守れり』（廿一節）

彼は確かに律法を守つたであらう。然し彼はこれを守りし事が彼が永生を受くべき理由となるものにあらざる事を知らず、却つて自らこれを誇り、之に恃んだのが誤である。彼は自己の義は神の聖前には襤褸の如く何物もあらざるを知り、人間の義であるイエス・キリストを信じて受納る事によつて永生を賜る事を知らなかつた。

【四】『金を愛した。』

『彼は之をきゝ甚く悲しめり、大に富める者なればなり』（廿三節）

彼が憂へたのは富みたるが爲でなく、自己の富に執着し、富を愛したるが爲に、こ

れをすつべく命ぜられし時苦んだ、彼は眞の富は、彼の財でなく、主イエス・キリストであることを知らなかつた。

四、富の危険

『イエスこれを見て言ひ給ふ、富める者の神の國に入るは如何に難いかな』(廿四節)

富の危険について聖書の言より引照すると

- 一、『己の富を恃むものは仆れん』(箴十一〇廿八)
- 二、『財實は人を惑はす』(マタイ傳十三〇廿三)
- 三、『富る者の資財はその堅き城なり、これを高き石垣の如くに思ふ』(箴十八〇十一)

富は偽の平安を與へるものであつて、高き石垣なりと夢想させるがその實牢獄の墻

塀である。

- 四、『我をして貧しからしめず、また富ましめず、惟なくてならぬ糧を與へ給へ、そは我あきて神を知らずと言ひ、エホバは誰なりやといはんことを恐る』(箴卅〇八、九)

五、然れど富まんと欲する者は、誘惑と罫また人を滅亡と沈淪とに溺らす愚にして害ある各様の慾に陥るなり。それ金を愛するは諸般の悪しき事の根なり、或る人々これを慕ひて信仰より迷ひ、さまざまの痛をもて自ら己を刺しとほせり。

(テモテ前書六〇九、十)

五、富の用法

- 一、『與へよ』

『貧しき者に分け與へ得る爲に手づから働きて善き業をなせ』(エペソ四〇廿八)
正當なる勤勞を勵まし貧者を救ふことは之は富の用法の一つである。

二、『己が友を得よ』

『不義の富をもて、己が爲に友をつくれ、然らば富の失する時、その友なんぢを永遠の住居に迎へん』(ルカ傳十六〇九)

『不義の富』とはこの世の金錢の事で『己が友を得よ』とは靈魂を救ふことである
『乏しからん時』は富をあとに残してこの世を去る時『その友なんぢらを永遠の住居に迎へん』とは汝によりて救はれたる靈魂が先だちゆきて天國に於て汝を待ち、汝の來るを歡迎するの意である。

三、『神悦び給ふ』

『仁慈と施濟とを忘るな、神は斯の如き供物を喜びたまふ』(ヘブル書十三〇十六)

『おの／＼喜むことなく、強ひてすることなく、その心に定めし如くせよ。神は喜びて與ふる人を愛し給へばなり』(コリント后書九〇七)

四、神償ひ給ふ

『汝の糧を水の上に投よ、多の日の後再び之を得ん』(傳道書十一〇一)
『貧者を憐む者はエホバに貸すなり、その施濟はエホバ償ひ給はん』(箴十九〇十七)
『まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり』(マタイ廿五〇四十)
『人に與へよ、然らば汝らも與へられん。人は量をよくし、押し入れ、搖り入れ溢るゝまでにし、汝らの懐中に入れん。汝等おのが量る量にて量らるべし』(ルカ傳六〇三八)
その他(箴言廿八〇廿七、マタイ十〇四二、ヘブル六〇十、マルコ十〇廿八―卅)

結

論

この會談の結果は罪の自覺である。主は青年の目を開いて彼が自己の真相を悟らしめ給ふた。即ち之によりて

- 一、富は貧に勝らず。
- 二、人の義は襤褸にして神の前には自らを装ふに足らず。
- 三、宰たる技倆は全き單純なる信賴の妨害をなす時の奴隸の軛たることを示し、救はれんと欲する者は、寡婦、税吏、嬰兒の如くならねばならぬ事を教へ給ふた。

第二一、主イエスと税吏の長ザアカイ

『題目』 生命に至る悔改

『エリコに入りて過ぎゆき給ふとき、視よ、名をアザカイといふ人あり、取税人の長にて富める者なり。イエスの如何なる人なるかを見んと思へど、丈矮うして群衆のために見ること能はず、前に走りゆき、桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給ふ故なり。イエス此處に至りしとき、仰ぎ見て言ひたまふ『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎ふ。人々みな之を見て眩きて言ふ『かれは罪人の家に入りて客となれり』ザアカイ立ちて主に言ふ『主、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、若し、われ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん』イエス言ひ給ふ『けふ救はこの家に来れり、此の人もアブラハムの子なればなり。それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり』(ルカ傳十九〇一—十)

此の會談の鑰節はルカ十八〇廿四—廿八であつて、富める人の救は

人間の側より言へば——富める者は救はれ難し(十八〇廿四)

神の側より言へば——富める者は救はれ得る(十八〇廿七)

のである。然して前者は富める青年にして、後者は富める税吏なるザアカイである。

研究すべき五の要點

一、富める青年とザアカイとの比較

【一】 彼等の身分の比較

富める青年——富者、宰、義人

ザアカイ——富者、長、罪人

【二】 更にその状況を對照せば

富める青年——彼はイエスに來り、彼は己が義を獻げ、彼は永生を儲けんと欲した——徹頭徹尾自己の行爲に由らんとす。

ザアカイ——主が彼に來り、主が自らを彼に與へ、主が救を授け給ふた——
唯神の恩賜による。

二、ザアカイの熱心

ザアカイが救はれたのは全く神の恩恵によるのであるが、又一面彼の内には一種の熱心が燃えてゐた。その熱心は

【一】 主イエスを見んとして熱心であつた。

「イエスの如何なる人なるかを見んと思へど、丈矮うして群衆のために見ること能はず、前に走

りゆき、桑の樹にのほる。イエスその路を過ぎんとし給ふ故なり」(十九〇三、四)

彼は主イエスを見んがために己を忘れて滑稽なる行爲をもあへてした。即ち「見んと欲ひ」「走りゆき」。斯の如く我等も聖書を讀む時、主を見んとの熱心が必要である。

【二】 主を歓迎せんとして熱心であつた。

「ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎ふ」(十九〇六)

彼は主イエスの聲を聞くや否や「急ぎおり」、「喜びてイエスを迎ふ」。

【三】 悔改めて主に従ふ事に熱心

「ザアカイ立ちて主に言ふ『主、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、若し、われ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん』(十九〇八)

「ザアカイ立ちて主に言ふ」とある如く、彼は此時まで隨喜の涙に咽んで主の足許に

俯伏していたが人々が嘲り訴ふるを聞き、奮然立ちて悔改の實を顯はしたのである。

三、ザアカイの感動

彼は最初好奇心に驅られて主イエスに來たが、遂に悔改めて主に従ふに至つた。その内心の變化は特に注意すべきであつて、之に由つて主が如何にして罪人に救を施し給ふかを學び得る。

【一】 主尋ね求め給ふ。

ザアカイの心が動かされたのは主イエスの御熱心に感じたのである。罪人の救はるるのはこれであつて、我等が神を求むるのでなく神が我等を求め給ふからである。

イ、魂を求め給ふ。

亡ぼされし魂を神は求め給ふ（ルカ傳十五章、十九章參照）

ロ、果を求め給ふ

救はれし靈魂が好き果を結ぶことを求め給ふ。（われ來りて三年間果を求む。

ルカ傳十三〇七）

ハ、禮拜者を求め給ふ

救はれし者が榮光と讚美を主に歸し奉る事を求め給ふ（ヨハネ四〇廿三）

【二】 ザアカイは如何に感ぜしや。

イ、主イエスの態度

『仰ぎ見て』彼は桑の樹の葉の間に隠れた己を主に仰ぎ見られてその心が動いた。主は今も世の樂の間に隠れ居て苦める魂を仰ぎ見て求め居らるゝのである。

ロ、主イエスの智識

『ザアカイよ』名を呼ぶはその人を知る徴である。一面識もなきキリストが彼の名を呼ばれた故に、彼は驚きと同時にキリストに對する信仰は電光の如く閃き出た（黙三〇十五、ヨハネ四〇十七、一〇四八）今も罪人は聖言の劍によつてその正体を照らされ、赤裸に顯はし出された時、その心動きて信仰を起すのである。

ハ、主イエスの愛

『今日われ汝の家に宿るべし』主イエスは罪人なる彼の家に宿ると曰ふた。ザアカイは其愛に感動せざるを得なかつた。『視よ、われ戸の外に立ちて叩く』（黙三〇廿）神は人の心の外に追ひ出されて居給ふ。然し神は人の心の外に立ちて入りて宿らんとしてその心の戸を叩きて居給ふ。この深き愛！人はこの深き愛に動かされない

でおらうか

四、ザアカイの信仰

【一】『彼は試られた』。

主は彼に救を施して恩恵を授けんとされず、先づ御自身を提供して『われ汝の家に宿るべし』と曰ふた。主はこれによりて彼に恩恵を愛するか、それとも恩恵の主を愛するかを試み給ふた。（ルカ廿四〇廿八、廿九）

【二】『證明せられた』。

彼は恩恵に目をつけず、主の御慈愛に勵まされて主を受納れ、悔改めと献物とを以て自己の信仰の實を證明した。（徒十九〇十八、十九）

【三】『報酬られた』

『救は今日この家に來たれり』、ハレルヤ。『今日我汝の家に宿らん』との聖言を信じて主を受納れし者に『今、救は來る』のである。ザアカイは永遠の救をもて酬いられた。

五、ザアカイを救へるものは何か

『この人もアブラハムの子なればなり』即ち彼の信仰である。凡て主イエスを已が救主として信する者は救はれる（ガラテヤ三〇七）。

第二、主イエスと悪しきをなせる婦

『題目』 心を碎けしむ

「爰に或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給ふ。視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席に於給ふを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、泣きつゝ御足近く後にたち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひ、また御足に接吻して香油を抹れり、イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言ふ『この人もし預言者ならば觸る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』イエス答へて言ひ給ふ『シモン、我なんぢに言ふことあり』シモンいふ『師よ言ひたまへ』『或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百一人は五十の負債せしに、償ひかたなければ、債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛すること孰か多き』シモン答へて言ふ『われ思ふに、多く免されたる者ならん』イエス言ひ給ふ『なんぢの判断は當れり』斯て女の方を振向きてシモンに言ひ給ふ『この女を見るか。我なんぢの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へず、この女は涙にて我が足を濡し、頭髮にて拭へり。なんぢは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。なんぢは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。この故に我なんぢに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるゝ事の少き者は、その愛する事もまた少し』遂に女に言ひ給ふ『なんぢの罪は赦されたり』同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言ひ出づ。爰にイエス女に言ひ給ふ『なんぢの信仰、なんぢを救へり、安らかに往け』(ルカ傳七〇三六一―五十一)。

研究すべき五の要點

一、この婦人とその前まへにあるルカ傳七章卅一節より卅五節のきじ記事との關係

『然れば、われ今の代の人を何に比へん。彼らは何に似たるか。彼らは童、市場に坐し、たがひに呼びて「われら汝らの爲に笛吹きたれど、汝ら躍らず。歎きたれど、汝ら泣かざりき」と云ふに似たり。それはバプテスマのヨハネ來りて、パンをも食はず、葡萄酒をも飲まねば「悪鬼に憑かれたる者なり」と汝ら言ひ、人の子きたりて飲食すれば「視よ、食を貪り、酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」と汝ら言ふなり。然れど智慧は己が凡ての子によりて正しとせらる』

(ルカ七〇三二―三五)

この聖句の中に二種しゆのせいぐ人がある。

- 一、悲歌かなしみ哀哭あいこく斷食だんじきする人——バプテスマのヨハネの徒ともがら。
- 二、踊り歌うたひ飲食あんじよくする人——キリスト、イエスの徒。

であつて、一は世の罪惡を見て悲歌哀哭する人々で、他は世の救主を見て喜び歌ふ人々である。主イエスは彼等の何れにもその理由のあるを認めて賞讃し給ふたが、世は彼等の舉動に對して何等の反響も感動もなく、しかも彼等の真相を解せず、たゞ鬼に憑かれて酒食を嗜む者なりとして嘲るを見て譴責し給ふたのである。然してこれに應じて二人の人物が現出して來た。それは

【一】 バリサイ人シモン、

ヨハネの徒の悲歌哀哭を聞きながら、その心動かす、己の罪を認めず、歎かず、しかもイエスの徒の福音に對して何等の感動もなくして居りながら、自分がイエスを嘲り笑ふ徒にあらざるを證せんとして、主イエスを招待して偕に飲食せんことを求めた。彼等は、主イエスに對する皮相的同情者である。

【二】 『惡きをなせる婦』

イエスの徒の聲を聞きて心刺され又碎かれて己が罪を悔ひ、歎き苦しみ、イエスの福音によりて光を得、慰籍を得てイエスは罪人の友なりと信じて慕ひ來れる者。即ち主イエスに對する信實なる同情者である。

二、マタイ傳十一章廿節―卅節にある記事とこの婦人の記事との關係

「爰にイエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ、『禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業をツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。カベナムウよ、なんぢは天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業をソドムにて行ひしならば、今日までも、かの町は遺りしならん。然れば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のか

た汝よりも耐へ易からん』。その時イエス答へて言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯し給へり。父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり。凡ての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父のしる者は子また子の欲するまゝに顯すところの者の外になし。凡て勞する者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が轆を負ひて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが轆は易く、わが荷は輕ければなり』(マタイ十一〇二十一—三十)

マタイ傳十一〇十六—十九はルカ傳七〇三十一—三十五の記事と同じである。故にマタイ傳十一〇廿一冊の記事はルカ傳七〇卅五、卅六との間に來るべきものである。しかしてこの話によりて主イエスがこの世に對して語り給ふ三の態度を見ることが出来る

【一】頑固無頓着なる世の人々に對して『あゝ禍害なるかな』と曰ふてその罪を責めて警告し給ふた。(マタイ傳十一〇廿一—廿四)

【二】姦惡なる世の中において、謙りて主イエスを受け入れ、赤子の如く單純に主を信する者のあるを見て喜び『天地の主なる父よ、われ感謝す』と曰ひて感謝し給ふた。(マタイ傳十一〇廿五—廿七)

【三】『凡て勞する者、重荷を負ふ者は我に來れ』と曰ひて、勞れたる者重荷を負ふ者、惱める者、悲しめる者を招き給ふた。(マタイ傳十一〇廿八—卅)

ヨハネの徒の悲歌哀哭に心を打たれてゐた悪しきをなせる婦は、主イエスのこの御招きの聲を聞きて心碎かれ、慕ひ求めてイエスに近づき來たつたのであらう。

三、パリサイ人シモンの不信仰

パリサイ人シモンは——主イエスに對して少こしの信仰もなく、唯一個の尊敬すべき

人物として招待し、極めて皮相的に主の歡心を買はんとした。故に彼は主に對して、『足の水を與へず、接吻せず、油を抹らす』普通一般の禮儀さへも行はず無禮を極めた態度であつた。

【一】彼は飲み食ひ笛ふき等の安逸の途をどらうと考へた。

【二】彼は主イエスを饗宴に招待する事によつて、キリストを取税人遊女罪人の友であるといつたものでない事を證明しやうと試みた。噫々！然し、その心の中にあるところのものが出てこないわけにはゆかなかつた。(七〇三九)

【三】彼は自らを義とせんと務めてゐる間に主イエスと婦とを批難した。彼はイエスが罪人又は癩病人と接觸し給ふ事によつて汚され給はざるお方である事を知らなかつた。

四、婦の信仰

惡をなせる婦は——主イエスの言を聞き、その心は碎かれ、イエスを饑渴き戀慕ふたしかして主イエスに對して正當なる信仰と深き信頼とをもつてゐた。

この主イエスに對する信仰は根、この信仰より來る愛は幹、この愛より溢れ出でて働く行爲は果である。

【一】悔改

『この町に罪ある一人の女……泣きつゝ御足ちかく』(ルカ七〇三七、三八)
婦は主イエスの御言を聞き涙をもつて罪を悔改めて御前に來た。

【二】イエスに對して恐怖なし

「視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのバリサイ人の家にて食事の席にみ給ふを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、泣きつゝ御足近く後にたち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひ、また御足に接吻して香油を抹れり」(ルカ七〇三七、三八)

全き愛は懼れを除く。婦は主イエスを信じた爲にイエスを慕ひ求め、主に對して何等の恐怖も憚かるどころもなく、大膽に近づくことが出来た。

【三】 人に對して恐怖なし。

「イエスを招きたるバリサイ人これを見て、心のうちに言ふ『この人もし預言者ならば觸る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』」(ルカ七〇三九)

シモンはバリサイ人であつた。故に若もこの家に主イエスが在さなければ婦は如何なる事情があつても近づく事が出来なかつた。然し彼女は主イエスを信じ、彼を愛する故に批評、輕蔑、猜疑と慘忍に満てるシモンをも恐れず彼等の家に入り主に近づいた

【四】 婦の深き謙遜。

「泣きつゝ御足近く後に立ち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひまた御足に接吻して香油を抹れり」(ルカ傳七〇卅八)

『後にたち』『泣きつゝ御足近く』『足をうるほし』『御足に接吻して』云々——彼女の態度は謙遜にみち／＼である。彼女は主イエスを信じ仰ぎたる結果イエスの足下に俯伏して奴隸の如き態度をもつてイエスを禮拜した。眞の謙遜は眞の信仰より出でる、美名を貪る作爲的謙遜は傲慢であり偽善である。

【五】 満ち足れる喜悅

「香油の入りたる石膏の壺を持ち來り……香油を抹れり」(七〇三七、三八)

彼女の衷に満ち溢れたる喜悅は感謝となり、高價なる香油を惜みなくそゞぎ出して

その御足にぬつた。

【六】 深き柔和

パリサイ人シモンが咳き訴ふる内にありても婦は一言をも發せず主を信じ主を仰ぎ、たゞ黙して奥床しく御前に控えてゐた。

【七】 感恩の涙

「涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひ、また御足に接吻して」(七〇三八)
彼女の感恩の情は、涙となり、接吻となりて溢れ出でた。

五、主イエスの御言葉

【一】 パリサイ人に對する主の御言

イ、彼等の手拔を責め給ふた。

彼等のなした事の善惡でなく、なさなかつた手拔を責め給ふた。(マタイ傳七五〇
四二—四四參照)

ロ、この婦の愛を賞讃し給ふた。

【二】 婦に對する主の御言。

「遂に女に言ひ給ふ『なんぢの罪は赦されたり』爰にイエス女に言ひ給ふ『なんぢの信仰、なんぢを救へり、安らかに往け』(ルカ七〇四八、五十)

イ、『汝の罪赦されたり』

主イエスは先づ彼女に赦罪の宣告をなし給ふた。彼女はこの主の御言によりて永年の心の重荷は全くおろされた。

ロ、『なんぢの信仰、なんぢを救へり』

このところにて主はなんちの愛、なんちを救へりと言ひ給はなかつた事は特に注意すべきである。主イエスはシモンに對してこの婦の愛を賞し給ふた。然し婦に對してはその愛を賞めずその信仰を賞め給ふた。これは婦が主イエスを愛せし故に救れたのでなく、イエスを信じたる故に救はれ、救はれたる故に彼女の愛が溢れ出でたからである。

ハ、『安らかに往け』

此婦は今後主に従ふ故に批難、批評、悪罵を受けねばならぬ。そのなかによりて心の動かされざる様『安らかに往け』と確信を與へ給ふたのである。

第四、主イエスと捕へられ訴へられたる淫婦

『題目』 罪 の 赦

『イエス、オリブ山にゆき給ふ。夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教へ給ふ。爰に學者・パリサイ人ら姦淫のとき捕へられたる女を連れきたり、眞中に立て、イエスに言ふ、『師よ、この女は姦淫のをり、そのまゝ捕へられたるなり。モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言ふか』斯く言へるはイエスを試みて訴ふる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給ふ。かれら問ひて止まざれば、イエス身を起して『なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て』と言ひ、また身を屈めて地に物書きたまふ。彼等これを聞いて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給ふ『をんなよ、汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪する者なきか』女いふ『主よ、誰もなし』イエス言ひ給ふ『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』斯てイエスまた人々に語りて言ひ給ふ『われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』(ヨハネ傳八〇一—十二)

鑰語『われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

(ヨハネ傳八〇十二)

【世の光なるキリスト】

パリサイ人に對して——罪を示す光

婦人に對して——生命を與ふる光

パリサイ人はこの時に於て、既に主イエスを殺さんとする計畫であつた事は明白である(ヨハネ七〇一—十九、三十一—四五。八〇六參照)。然して彼等は主イエスを殺さんとして彼の前に來たが、光によりて曝露せられし如く、その罪を示され、捕へられ來りし婦人は碎かれ溶かされて罪の赦を得生命の光を與へられた。

研究すべき三種の人物

一、パリサイ人

【一】 慘酷無情

『爰に學者、パリサイ人ら、姦淫のとき捕へられたる女を連れきたり、真中に立て、イエスに言ふ』(ヨハネ八〇三)

彼等がこの婦を捕へて連れ來り、群衆の中にて恥かしむる事は、眞に義を愛し審判を求むる人のなすべきことでなく、却つて慘酷無情なる行動である。

【二】 臆病

『姦淫の時捕へられたる女を連れきたり』(ヨハネ八〇三)

モーセの律法によれば、姦淫をなしたる男女は二人共捕へて連れ來らねばならぬので

ある(申廿二〇二二—二四)然るに彼等は何故か女のみ捕へて連れ來り、男を連れ來らなかつた。これは臆病であり又卑怯である。

【三】 無學、無智

『モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言ふか』

(ヨハネ八〇五)

律法は神の命令によるものである。然るに彼等は之をモーセの命なりと公言した。彼等は儀文を解するのみにして(ヨハネ六〇三二)律法の眞意について全く無智であつた。

【四】 惡虐

『斯く云へるはイエスを試みて訴ふる種を得んとてなり』(ヨハネ八〇六)

彼等の行爲は惡意にて満ち、婦を殺し、又イエスを殺さんと企てた。實に彼等の行動は惡虐の外何の目的もなかつた。これを律法の大主眼とする『心を盡し、精神を盡し力を盡し、思を盡して主たる神を愛し又己の如く汝の隣を愛すべし』(ルカ十〇廿七)この神の誠命と對照すれば、彼等の行動は全く正反對にして、善き畑に毒麥を播く惡魔の如くである。

以上の四のパリサイ人の態度は彼等が惡魔の標本たることを示すものである。

二、婦 人

【一】 希望を生ず

恐怖と慚愧に心乱れ、暗黒につままれてゐた婦の心中に、主イエスの優さしき一言を

聞き天來の光明を認めて希望を生じて來た。

【二】 眞の悔改

『たゞイエスと中に立てる婦とのみ遣れり』(ヨハネ八〇九)

パリサイ人が遁れ去つた時に婦も遁れ去ることは出來た。然し婦は何時までもその中に立ちて己が眞相を光の前に曝露せられしまゝ默念として主イエスの宣告を待つてゐた。

【三】 信仰あり

『女いふ、主よ誰もなし』(八〇一一)

人の前を恐れぬのみならず、主イエスの前に立ちて動かさず、主を憐みある救主と信じて其の指圖を待った。しかしパリサイ人はイエスを師と呼んだが、婦はイエスを主と

呼んだ、主とは神に對するユダヤ人の語である。婦は主が一言をもつてパリサイ人の罪を示して退かしめ給ひしを見て驚き信仰を起したのであらう。

三、主 イ エ ス

【一】その神性

「イエス身を屈め、指にて地に物書き給ふ。かれら問ひて止まざれば、イエス身を起して、「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」といひ、また身を屈めて地に物書きたまふ。彼等これ聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人々々いでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり」(八〇六—九)

ユダヤ人はモーセの律法をもつて左右兩難の岐路に立たしめた。若し『許せ』といはばモーセの律法に背く反逆者として訴へられ『殺せ』といはゞ彼は慘虐にして罪人の

友にあらずといひて謗しらうとした。然るに主は驚くべき一言をもつて彼等の詰問を破壊し彼等をして如何ともなすことあたはざらしめ給ふた。これは主が人間の奸計を透視する超自然的の智慧と權威とをもつて御自身の神性をあらはし給ふたのである。

【二】その同情

「イエス身を屈め、指にて地に物書き給ふ」(八〇六)

主イエスは訴へられたる婦を見るに忍びず、身を屈めて地に物を書き給ふた。この時イエスが地に書き給ふた事は、隠くれたるパリサイ人の罪であると或る人は言つた。

【三】その智慧

「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」(八〇七)

モーセの律法によると證人が先ず石にて打つべきである(申十七〇五—七)主イエスは

この律法の言を引用して之に『罪なき者』といふ驚くべき一句を加へて彼等に迫り、彼等の心を刺し、彼等に一寸の間隙も、誹謗も加へる餘地なからしめ給ふた。これは驚べき主の智慧である。(マタイ傳七〇五)

【四】 その能力

『彼等これを聞いて良心に責められ』(八〇九)

主イエスは彼等に向つて一言も審判を與へず、彼等自らをして審判かしめ給ふた。主の一言は彼等の良心を働かしめ、彼等自ら己を審きて居るに堪えざらしめ給ふた。(ヨハネ十二〇四七、四八)

【五】 その義

『イエス身を起して、女のほか誰も居らぬを見て言ひ給ふ』をんなよ、汝を訴へたる者どもは何

處にをるぞ、汝を罪する者なきか……われも汝を罪せじ』(八〇十、十一)

罪人の死刑執行の爲に必要な條件は、現場の證人の證言と裁判官の宣告である。然るに主が面を上げて見給ふた時には證人は已に逃げ去り、訴ふる者は一人もなかつた故に裁判官である主も亦宣告をなし得給はない。しかして『我も汝を罪せじ』と赦罪の宣告をなし給ふたのは當然のことにして一點の批難を加ふべき餘地がなかつた。これは主の義である。

【六】 その愛

『われも汝を罪せじ』(八〇十一)

主は審判主でなく救主である(ヨハネ十二〇四七、三〇十九)。又罪人を審くのは主の御役目でもない(ヨハネ三〇十七)。又仲裁人でもない(ルカ十二〇十三、十四)又こ

の世の王でもない（ヨハネ十八〇三六）主は救主である。罪人の罪を赦さんためにこの世に來り、十字架に釘けられて贖罪をなし、罪を赦すべき權威を造り給ふた（ヨハネ三〇十七）自ら誣はれて誣はれし者を救ひ給ふ、これは愛である。

然して今は恩恵の時主は禱告主として禱告をなし給ふ（ロマ八〇卅四、ヘブル四〇十六）この恩恵の座は終の日に大なる審判の座となり彼は審判主としてこの世に來り給ふたのである（ヨハネ五〇二七、十二〇四八、徒十〇四二）。

【七】 その 聖 潔 —— 無 罪

『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたゞび罪を犯すな』（八〇十一）

主イエスが身を屈めて地に物書き給ふとき、この婦も遁れ去つたとすれば如何であらう？ 主は婦の罪を觀過し給ふたといふ咎を受くべきであらうか。決して然らず、主

は沈黙の間にその婦の罪を彼の臨在の光の中に照して婦をして全く碎けて悔改めさせ給ふた。若も婦が悔改めずに遁げ去つても世の終末の日、即ち審判の日に、婦が此處にて受けし光に従ひてその罪の審判を受けなければならなかつた。幸にして婦は其處を去らず光の中において自らを審いた。故に主は婦に赦罪を與へ、而して『再び罪を犯す勿れど』慰安と警戒の言を與へ給ふた。

主は二度地に物を書き給ふた（八〇七、八）。或る人は（一）はパリサイ人の罪状を書き、（二）は婦に對する赦罪状を書き給ふたといふ。これは最も信すべき想像である。

第五 結

論

『斯てイエス人々に語りて言ひ給ふ「われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」』（八〇十二）

主は光にして救主で居まし給ふ。救の道は光に照されて己が罪惡を認め、而して救主を信じ頼りて救はるゝことを得るのである。主は光である。彼を接け彼に頼りし時に此の光は生命の光となり、生命を得さしむるのである。然るに世の人は、この光をうけず、又愛せず、却へつて暗きを愛する故に救はるゝ事を得ぬのである（ヨハネ一〇九—一二。三〇十九、二十）。

第五、主イエスとパリサイ人の宰ニコデモ

『題目』 靈魂の新生

「爰にバリサイ人にて名をニコデモといふ人あり、ユダヤ人の宰なり。夜イエスの許に來りて言ふ『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る、神もし偕に在さずば、汝が行ふこれらの徴は誰もなし能はぬなり』イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず』ニコデモ言ふ『人はや老ぬれば、争で生るゝ事を得んや再び母の胎に入りて生るゝことを得んや』イエス答へ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入ること能はず、肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり。なんぢら新に生るべしと我が汝に言ひしを怪しむな。風は己が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈によりて生るゝ者も斯のごとし』ニコデモ答へて言ふ『いかで斯る事どもあり得べき』イエス答へて言ひ給ふ『なんぢはイスラエルの師にして猶かゝる事どもを知らぬか。誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證す、然るに汝らその證を受けず。われ地のことを言ふに汝ら信ぜずば、天のことを言はんには争で信ぜんや。天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。モーセ荒野にて蛇を擧げしごとく、人の子もまた必ず

擧げらるべし。すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん爲なり』それ神はその獨子をふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣したまへるは、世を審かん爲にあらず、彼によりて世の救はれん爲なり。彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行爲の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。すべて悪を行ふ者は光をにくみて光に來らず、その行爲の責められざらん爲なり。眞をおこなふ者は光にきたる、その行爲の神によりて行ひたることの顯はれん爲なり。』

(ヨハネ三〇一―廿一)

【注意を要する點】

ニコデモはイエスを師として來り『我等は知る』といひて教へを求めた。故に主イエスは自ら師として來れるのでなく、救主としてこの世に遣はされたる者なることを明かになし給ふた。救は智識によるのではなく信仰による實質の變化である。

對照

ニコデモ——『師よ我儕は知る』

イエス——『人若し新に生れずば』

研究すべき要點

一、救とは何ぞや

——聖靈の働なり——

『イエス答へ給ふ』まことに誠に汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入ること能はず、肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり。なんぢら新に生るべしと我が汝に言ひしを怪しむな。風は己が好むところの吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈によりて生るゝ者も斯のごとし』ニコデモ答へて言ふ『いかで斯る事どもあり得べき』イエス答へて言ひ給ふ『なんぢはイスラエルの師にして猶かゝる事どもを知らぬか。誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證す、然るに汝らその證を受けず。われ地のことを言ふに汝ら信ぜずば、天のことを言はんには争で信ぜんや。天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし』(ヨハネ三〇五—十三)』

【一】 生命なり、生れ更ることなり。

『斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、たゞ神によりて生れしなり』

(ヨハネ一〇十三)

人は何人でも自ら生れることが出来ない。己の勞力、己の意志、己が方法努力をもつ

てしても生れ更ることが出来ない。これは全く聖靈の働によるものである。

【二】 新生命なり。

『その凡ての人に代りて死に給ひしは、生ける人の最早おのれの爲に生きず、己に代り死にて甦へり給ひし者のために生きん爲なり』(コリント后書五〇十七)

舊き生命を矯正するのではなく、新たに創造せらるゝのである。新天新地を創造し給ふ神は我儕の靈魂の衷にも新天新地を創造し給ふ。

【三】 更生、即ち第二の誕生である。

『斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、たゞ神によりて生れしなり』

(ヨハネ傳一〇十三)

『肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり』

(ヨハネ傳三〇六)

人間の肉体の如く自然的誕生によりて始まつたものでなく、或る時期に於て聖靈によつて生れ代つたのである。肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なりで肉によりて生れるのでなく、聖靈の働によりて生れるのである。

【四】 上より生れる。

『その造り給へる物の中にて我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のまゝに真理の言をもて、我らを生み給へり』（ヤコブ書一〇十八）

主イエスは御自身と人とを區別して『汝らは下より出で、我は上より出づ、汝らはこの世より出で、我はこの世より出でず』（約八〇廿三）と曰ふた、その如く、天來の生命を受くる事。地に屬き、肉に屬き、情慾に屬ける人間より生るゝのでなく、主イエスの生れ給ひし如く同じ源より生命を受くるのである。

【五】 神によりて生るゝ事。

『斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、たゞ神によりて生れしなり』

（ヨハネ一〇十三）

血肉、門閥、教育によりて生れるのでなく、神によりて生れるのである。

【六】 靈魂の中に新しき生命を得ること。

『肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり』（ヨハネ三〇六）

罪によりて失はれたる人間の生の息が、神の生の息によりて再び興こされ活ける靈となるのである。

【七】 奥義である。

『風は己が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて

靈によりて生るゝ者も斯のごとし』(ヨハネ三〇八)

これは人の智慧にては悟り得ざる隠れたる秘密にして、聖靈によりてのみ悟り得る所の奥義である。

【八】 神の言によりて生れる事。

「人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入るに能はず」(ヨハネ三〇五)

「然れば凡ての穢と溢るゝ惡とを捨て、柔和をもて其の植ゑられたる所の、靈魂を救ひ得る言を受けよ」(ヤコブ一〇廿一)

ヨハネ傳三章五節にある『水』は『言』をあらはすもので(エペソ五〇廿六)言を聞くにより、又これを信するに由りて神の靈が生命をもて靈魂の内に働き人の心を新生せしむるものである。

以上によりて、救はるゝ事は人間の實質の變化を意味するものにして、我儕は斯く

救はれて初めて、神の國の奥義を見(悟り)又神の國に入る(味ふ)ことを得るのである。

第二、救は如何にしてなされるか

— 聖子の働なり —

『モーセ荒野にて蛇を擧げしごとく、人の子もまた必ず擧げらるべし。すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん爲なり』(ヨハネ三〇十四、十五)

罪を犯したる者が新たに生命を受くる爲に先づ罪の赦が必要である。又聖靈が人の心に働き給ふ前に先ず聖子イエスは贖罪の爲に十字架上で贖の血を流さればならぬ。それ故に主イエスは『杆上の蛇』を示して贖罪の死を要する事を示し給ふた。

『モーセ野に蛇を擧げし如く、人の子も擧げられざるべからず』(ヨハネ三〇十四英譯)

主イエスの十字架上の死は必ずなし遂げねばならぬ事を示さんとして特に斯く強き助働詞を用ひ給ふた。斯の如く救は聖靈の働にして救の基礎は聖子の贖罪によるのである。更に『杆上の蛇』なる十字架上のキリストを知る爲に必要な条件を研究すれば

【一】 自分が罪の爲に苦み、咀はれ痛められ禍され滅びつゝある者なる事を悟らねばならぬ。

罪を犯せる者が自らの罪の爲に咀はれ禍され滅び行きつゝある者なる事を悟らねば、キリストの十字架の奥義を知る事は出来ない。

【二】 其の罪を認はし、謙だり、神に向ひて泣き叫ぶ事を要す。

自分自ら十字架の奥義を知らんとして悶え苦むのでなく、自ら眞實に碎き抜かれて救

を求むることである。

【三】 十字架上のキリストを見上げ、己が罪の爲に贖となり給へる救主を信する事である。

斯くすれば十字架に釘けられ給ひし主は、鐵の磁石に吸付けらるゝ如く、罪の毒を滅して新しき生命に甦へらせ給ふのである。

第三、何故救はなされしや

— 聖父の愛なり —

『それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣したまへるは、世を審かん爲にあらず、彼により世の救はれん爲なり』(ヨハネ三〇十六、十七)。

何故斯の如き大なる救がなし得らるゝかといへば、その源は聖父の愛によるのである。神は我らを愛するあまり、我らを罪より救はん爲に最も愛しみ給ふ聖子、榮光ある唯一の榮光の主を惜みなく與へ給ふた。(エペソ二〇四、テトス三〇四、ヨハネ壹書四〇九、十)

第四、誰が救を受くべきや

—— 罪人への恩典なり ——

「彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行爲の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。すべて悪を行ふ者は光をにくみて光に來らず、その行爲の責められざらん爲なり。眞をおこなふ者は光にきたる、その行爲の神によりて行ひたることの顯はれん爲なり」(ヨハネ三〇十八—廿一)

誰にても、凡て如何なる人物にても信する者は悉く救はるゝのである。然し救の條件を具体的にいへば

【一】 光に來る事(罪を悟ること)。

如何なる人物にても光に來らずして自らの罪の罪たる事を知る事が出來ない。神は罪人を救はんとして救の道を開き給ふた。然し罪人が暗きを愛して光に來らず、自ら罪人たる事を認めねば神の救を受くる事は出來ない。神が救ひ給はないのでなく、又救ひ得ないのでなく、人が神の救を拒むのである。

【二】 十字架上のキリストを信すること。

自分の罪を悟り、光に來つて自ら罪人たる事を認むる者もキリストの十字架に來らね

ば神の救に興あつる事は出来ない。己おのれの罪を悟さとり、キリストの十字架かに來らずして自らその罪を矯正けいせいせんと努つとめ、或あるひは他のものに依より頼たんとする者は、唯ただ煩悶はんもんを重ねかさねるのみである。人の罪より救すくはるべき途みちはキリストの十字架かを信しんずるより外ほかに途みちはない。

第六、主イエスとサマリヤの賤婦

『題目』 聖靈の賜

『主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネよりも多しとバリサイ人に聞えたるを知り給ひし時、(その實イエス自らバプテスマを施しゝにあらず、その弟子たちなり)ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給ふ。サマリヤを経ざるを得ず。サマリヤのスカルといふ町にいたり給へるが、この町はヤコブその子ヨセフに與へし土地に近くして、此處にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給ふ、時は第六時なりき。サマリヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言ひたまふ。弟子たちは食物を買はんとて町にゆきしなり。サマリヤの女いふ『なんぢユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。イエス答へて言ひ給ふ『なんぢ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を與へしものを』女いふ『主よ、なんぢは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何處より得しぞ。汝はこの井を我らに與へし我らの父ヤコブよりも大なるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』イエス答へて言ひ給ふ『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。然れど我

があたふる水を飲む者は永遠に渴くことなし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』女いふ『主よ、わが渴くことなく、又こゝに汲みに來ぬために、その水を我にあたへよ』イエス言ひ給ふ『ゆきて夫をこゝに呼びきたれ』女こたへて言ふ『われに夫なし』イエス言ひ給ふ『夫なしといふは宜なり。夫は五人までありしが、今ある者はなんぢの夫にあらず。無しと云へるは眞なり』女いふ『主よ、我なんぢを預言者とみとむ。我らの先祖たちは此の山にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと言ふ』イエス言ひ給ふ『をんなよ、我が言ふことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拜する時きたるなり。汝らは知らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人よ出づればなり。されど眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり。父は斯のごとく拜する者を求めたまふ。神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり』女いふ『我はキリストと稱ふるメシヤの來ることを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』イエス言ひ給ふ『なんぢと語る我は、それなり』時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれど、何を求め給ふか、何故かれと語り給ふかと問ふもの誰もなし。爰に女その水瓶を遣しおき、町にゆきて人々にいふ、『來りて見よ、わが爲しし事をことごと

く我に告げし人を。この人、或はキリストならんか。人々町を出でてイエスの許にゆく。この間に弟子たち請ひて言ふ「ラビ、食し給へ」イエス言ひたまふ「我には汝らの知らぬ我が食する食物あり」弟子たち互にいふ「たれか食する物を持ち來りしか」イエス言ひ給ふ「われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。なんぢら收穫時の來るには、なほ四月ありと言はずや。我なんぢらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、はや黄みて收穫時になれり。刈る者は、價を受けて永遠の生命の實を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん爲なり。俚諺に彼は播き、此は刈るといへるは、斯において眞なり。我なんぢらを遣して勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるなり」此の町の多くのサマリヤ人、女の「わが爲し、事をことごとく告げし」と證したる言によりてイエスを信じたり。斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請ひたれば、此處に二日とゞまり給ふ。御言によりて猶もおほくの人、信じたり。かくて女に言ふ、「今われらの信するは汝のかたる言によるにあらず、親しく聽きて、これは眞の世の救主なりと知りたる故なり」(ヨハネ四〇一—四二)

【前回のヨハネ傳三章とこのヨハネ傳四章との比較對照】

ルカ傳十八章と十九章にあつた對照の如く、富める青年は救はれず、不義なるザアカイが救はれたと同じく、ヨハネ傳三章に於ける最も尊き宗教家にして義しきニコデモは救はるゝに至らずして退き、ヨハネ傳四章のサマリヤに於ける最も賤しき不義なる婦人が救はれ、聖靈に満たされて往つた。今この兩會談を比較對照すること、

【第三章】

- 一、人は主イエスを求む。
- 二、人は智識を求めて來り。
- 三、問題は、如何に(四節)如何で(九節)生るべきか、學者すら到底解することが出来ない。

- 四、主の言は、生命の賜。
- 五、比喻は、暗、光、風。
- 六、ニコデモは好き意をもちて信じて来り而して空しく去つた。

【第四章】

- 一、主イエスは人を求む。
- 二、主は生命を興へん爲に来らる。
- 三、問題は、如何で（九節）何處にて水を得べきか（十一節）婦は到底解することが出来なかつた。
- 四、主の言は生命を興へる靈の賜。
- 五、比喻は、渴き、水。

六、サマリヤの婦は偏見をもつて来り、満されて歸へる。

研究すべき四の要點

一、サマリヤの婦（人の魂の真相）

【一、表面の觀察】

【一】 缺 乏

「サマリヤの或女、水を汲まんとて来りたれば、イエス之に「われに飲ませよ」と言ひたまふ」
(四〇七)

彼女は日中水を汲みに来た。これは貧者の常である。人の心は常に貧しくして乏しく
憐れなる状態に陥つて居る。

【二】 偏 見

『サマリヤの女いふ』「なんぢユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか」これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり』(四〇九)

サマリヤの女とユダヤ人との間の如く、人の心は常に與へんとする眞の救主に對して偏見をもつてゐる。

【三】 愚 昧

『女いふ』主よ、わが渴くことなく、又こゝに汲みに來ぬために、その水を我にあたへよ』

(四〇十五)

この婦は主イエスに活ける水を示されてゐながら尙井戸の水の事を思つてゐた如く、人の心が新生せず、靈によらねば神の事は辨へ得ない。

【四】 罪 人

『女こたへて言ふ』「われに夫なし」イエス言ひ給ふ『夫なしといふは宜なり。夫は五人までありしが、今ある者は、なんぢの夫にあらず。無しと云へるは眞なり』(四〇十七、十八)

この婦は五人の夫に仕へてゐた如く、人の心は常に罪の下にあつて愛嬌を賣りつゝある。

【二】 裏面の觀察

【一】 婦の裏に神を知らんとする高尚なる希望が存在してゐた。

『女いふ』主よ、我なんぢを預言者とみとむ。我らの先祖たちは此の山にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと言ふ』(四〇十九、二十)

この願望は婦の心中深く潜伏してゐたが罪惡の爲に覆はれてゐた。然し主イエスによつてその罪惡を指摘され、主を眞の預言者として知るや否や、この願望は俄然勃興し神を禮拜する道を求めた。婦はこの時痛く自己の罪を指摘され、恥辱と恐怖にみちて

ゐたが、自己の中にこの願望が浮び上ると、一切の恥辱も恐怖も忘れて、大膽に主イエスに近づき且つ尋ねた。人の靈魂は種々様々なる娯樂と歡樂慰籍をこの世に求めてゐるが、その心の根底には神に向つて餓渴きつゝあるのである。

【一】 救主を待望んでゐた。

『汝らは知らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人より出づればなり』(四〇廿二)
 婦は微かながらも、古より約束せられてゐた預言者の言を記憶し、メシヤを待望んでゐた。人は自ら解し能はざる事を知れば、必ず天來の默示を望み、又自ら救ひ得ざる事を知れば必ず天來の救ふ力ある主を求むる様になるのである。

【二】 熱心且つ大膽である。

婦の中より偏見が除かれ、賜が示され、主イエス御自身が現はさるゝと、その一言一言、愈熱心に愈々大膽に、心中に潜伏してゐた愛情ある信任は勃興し來り、遂に主の御顔の前にあつて些少の恐怖もなくなつた。ハレルヤ。
 人の靈魂は表面より觀察すれば全く救はるべき望はない。然しその裏面より觀察すれば確實なる救済の見込があるのである。

二、神の賜(上)

【一】 自己を満足せしむ。

『されど我があれふる水を飲む者は、永遠に渴くことなし』(四〇十四)
 自己の心中に全き満足を與へられる。

【二】 人を満足せしむ。

『わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』(十四)

この賜物を受けし者は自ら満足するのみならず、更に泉の源となりて、そこより生命の水湧き出で、四圍の人々の爲にその水を注ぎ出すに至る。

【三】 神を満足せしむ。

『眞の禮拜者の靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり、父は斯の如く拜する者を求め給ふ。神は靈なれば拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり』(廿三、四)

この賜即ち聖靈は、神の父たるを示し、拜する者をして神を父として拜するを得さしむ、これは人の心の奥底深くに秘められたる満足にして、またこれは神御自身の深き御満足である。

三、神の賜(下)

【一】 永續的である。

『わが與ふる水は彼の中にありて泉となり、永遠の生命の水湧き出すべし』、永遠に絶えず湧きつゞけて永生に至る。

【二】 潔むる力。

『水、泉』主洗ひ潔むる働をなす、主は之によつて聖靈の潔むる力を示し給ふ。

【三】 靈魂を満足せしむる。

『永遠に渴くことなし』常に満し、かくて永遠にまでいたる。

【四】 他を恵む所の恵。

『泉となりて永遠の生命の水湧き出づべし』

【五】 内 心 的。

『彼の中にて』

【六】 神 の 賜

『わが與ふる水は』

【七】 誰れにも及ぶ。

『わが與ふる水を飲むものは』飲む者、即ち誰れにても信じて飲みさへすれば。

四、主イエスの靈魂を導き給ふ方法

主イエスは人間の靈魂を救ふために必要なる三のものを示された。即ち『なんぢ若し

神の賜物を知り、また我に飲ませよ、といふ者の誰なるかを知らんには、之に求めしならん。然らば汝に活ける水を與へしものを』(四〇十)この一節の中にあらはされたものは(一)賜なる活ける水(聖靈)、(二)賜の主なる父、(三)仲保者なる主御自身である。

【一】 賜なる聖靈。

主イエスは第一に賜なる聖靈を提出し給ふた。故に婦はこれによりて餓渴を起して慕ひ求むるに至つた。無頓着なる靈魂を導く時に特に肝要なるはこの點であつて、先ず何よりも彼の求むべきものを示さねばならない。ヨハネ傳三章に於ても同様に主は先ず新生の賜を示し給ふた。使徒行傳二章に於ても使徒ペテロはこの聖靈の賜を示した

(使二〇十四—廿一)

【一】 賜の主なる父。

更に主は神を父として示し（四〇廿一—廿四）聖靈は神を父として拜む所より受け得べきものなることを示し給ふた。又主はこれを父の賜として語り給ふた（ルカ十一〇—十三）又これを父の約束せし所のものとして示し給ふた（使一〇四）。

【二】 仲保者たるイエス・キリスト。

即ち最後に御自身を顯はし給ふた（四〇廿五）主は聖靈を賜として示し又父なる神を與ふる主として示し、その二者の間の仲保者、救主として主イエス御自身を顯はし給ふた。而して如何にして婦に御自身を顯はし給ふたかといへば

イ 婦の罪を一言の下に指摘してその心を刺し給ふ。

『汝の夫を呼び來れ』（十六）この一言によりて婦の心は刺し貫き、その真相を曝露し給ふた。

ロ 自己の權能を示し給ふ。

故に婦は主イエスが全知者でおはすことを知つて驚いた。ヨハネ傳一〇四七—四九にあるナタナエルに對しても同様であつて、これは又現在に於ても同様である。聖書が神の言であることを信じ得る第一の理由は我らがこれを讀む時に、自己を知り、罪を知り、痛く刺さるゝ點にある。

参照——靈魂を導く順序

【一】 ヨハネ傳三章に於て

(一) 聖靈、(二) キリスト、(三) 父なる神、(四) 罪。

【二】 ヨハネ傳四章に於て

(一) 聖靈、(二) 罪、(三) 父なる神、(四) キリスト。

【三】 使徒行傳二章に於て

(一) 聖靈、(二) キリスト、(三) 父なる神、(四) 罪人のなすべきこと。

第七、主イエスと十字架上の盗人

『題目』 臨終の平安

「また他に二人の悪人も、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく。髑髏といふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。斯てイエス言ひたまふ「父よ、彼らを赦し給へ、その爲す所を知らざればなり」彼らイエスの衣を分ちて鬪取にせり、民は立ちて見むたり。司たちも嘲りて言ふ「かれは他人を救へり、若し神の選び給ひしキリストならば已をも救へかし」兵卒ども、嘲弄しつゝ近よりて酸き葡萄酒をさし出して言ふ、「なんぢ若しユダヤ人の王ならば、已を救へ」又イエスの上には「此はユダヤ人の王なり」との罪標あり。十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言ふ「なんぢはキリストならずや、已と我らとを救へ」他の者これに答へ禁めて言ふ「なんぢ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。我らは爲し、事の報を受くるなれば當然なり。然れど此の人は何の不善をも爲さざりき」また言ふ「イエスよ、御國に入り給ふとき、我を憶えたまへ」イエス言ひ給ふ「われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕にパラダイスに在るべし」(ルカ傳二十三〇三十二—四十三)

カルバリ山上に主イエスを中心として三本の十字架が立てられた。元來主イエスの釘けられた十字架はバラバの爲に準備されたものであるが、バラバは釋され、その代りとしてイエスが之に釘けられ給ふたのである。主イエスの兩側の罪人の中、一人は悔改め、一人は終までイエスを誣つたが、悔改めし罪人との十字架上の會談がこの研究の題目である。

研究すべき三の要點

一、盗人はその罪を確認させられた

【一】罪の確認は突然であつた。

「ともに十字架につけられたる強盗どもも、同じ事をもてイエスを罵しれり」

(マタイ廿七〇四四)

マタイ傳にある『強盜ども』と複数に記されてあるところをみると、この盗人も亦最初は他の盗人の如く主イエスを嘲弄してゐた様である。又傳説によれば彼等は二人ともバラバの黨族であつた。バラバは普通の盜賊でなく、所謂愛國者にしてユダヤをローマの權威より救出さんとして慨嘆しつゝあつた者で、彼等は山に棲み、谷に隠れ、出沒隠現しては時々騒動を起し、掠奪をこゝしてゐた。又一面彼等はメシヤの出現を俟望み、イエスの顯はれ給ふた時、彼は眞のメシヤなるや否やを問題とし、その説教を聞きて余りに心靈的なる爲失望し、これはメシヤにあらずと非議してゐたる者の様である。この盗人は斯るバラバの黨類であつた爲、最初イエスを嘲弄した事は當然のことであつた。然し彼は如何にして罪を認むるに至つたかといへば、

【二】 婦よ我ために泣く勿れ。

「民の大なる群と歎き悲しめる女たちの群と之に従ふ。イエス振反りて女たちに言ひ給ふ、「エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな、たゞ己がため、己が子のために泣け。視よ「石婦・兒産まぬ腹・飲ませぬ乳は幸福なり」と言ふ日きたらん。その時ひとゞと「山に向ひて我らの上に倒れよ岡に向ひて我らを掩へ」と言ひ出でん。もし青樹に斯く爲さば、枯樹は如何にせられん」また他に二人の惡人をも、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく」(ルカ廿三〇廿七―卅二)

裁判官ピラトの前より此盗人はイエスと偕に刑場に曳き出されて往つた。イエスは裸足にて十字架を負ひてゆき給ふ時、慟哭きつゝ従つて來たエルサレムの婦たちに向つて、エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな……といひて却へつて彼等を教へ給ふ主イエスの言を盗人達はつぶさに聞いてゐた。

【三】 我國はこの世の國に非ず。

「イエス答へ給ふ「わが國はこの世のものならず、若し我が國この世のものならば、我が僕ら我

をユダヤ人に付さじと戦ひしならん。然れど我が國は此の世よりのものならず」

(ヨハネ十八〇卅六)

ピラトの庭に於て斯く言ひ給ふイエスの言を盗人は聞いたであらう。イエスの言ひ給ふ王國はこの世の國でなく、メシヤの國を指し給ふたものだと分つた。

【四】 罪標に『ユダヤ人の王イエス』。

『又イエスの上には『此はユダヤ人の王なり』との罪標あり』(ルカ廿三〇卅八)

十字架上に掲げられた罪標は、當時の天下の三大語にて公表せられた。即ち文學と教育の國なるギリシヤ語、政治律法の國なるロマ語、宗教國なるヘブル語の三ヶ國語にて『ユダヤ人の王』と記されあるのを盗人は見、この前代未聞の罪標の爲めにひそかに驚いたであらう。しかしてイエスがピラトの庭にて答へ給ふた言を聯想し、その心

に深き感動をもちつゝ、棘の冠の下に血に染みながらも、天の榮光に輝き給ふ聖顔を拜して心打たれたであらう。

【五】 父よ彼等を赦し給へ。

『鬪體といふ處に到りてイエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。斯てイエス言ひたまふ『父よ、彼らを赦し給へ、その爲す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちて鬪取にせり』(ルカ廿三〇卅三、四)

この兵卒達の殘虐無禮なる取扱ひを憤怒と呪咀とをもつて酬ゆべきであるにかゝはらず、主イエスの聖顔は却へつて慈愛と憐憫の色に満ちて『父よ、彼等を赦し給へ、そのなすところを知らざればなり』と彼等の爲に父なる神に赦罪を祈られた。盗人は自己の心情に比較して實に奇怪に絶えなかつたであらう。然して斯る兵卒達の爲に尙赦

罪を祈り給ふ程であれば、我の如き者にも亦救を與へて下さるであらうと思へば、始め嘲笑した事が慚愧に絶へなかつたと思はるゝ。

【六】 民は立ちて見てゐたり、司たちも嘲りて。

『民は立ちて見たり。司たちも嘲りて言ふ「かれは他人を救へり、若し神の選ひ給ひしキリストならば己をも救へかし」』(ルカ廿三〇卅五)

往來の人も司達も何の感動もなく、冷笑してイエスを見、嘲笑しては嗤ふ。一方の盗人さへも『汝キリストならば己と我とを救へ』と嘲笑惡罵を浴びせかける中であつて主イエスは彼等の言に些も動かされ給はず、天を仰いで父に救を祈り給ふその容姿、風貌、實に恩寵と眞理にて満ちてゐる給ふこの主イエスの聖顔を盗人は凝視して、その榮光の爲に心刺されたであらう。

第二、罪の悔改

【一】 神を畏れぬか。

『他の者これに答へ禁めて言ふ「なんぢ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか」』(ルカ廿三〇四十)

兵卒も祭司も司も群衆も悉く嘲笑を浴せかけてゐる時は、盗人は榮光ある主イエスを見て、己が罪を確認した結果、神を畏るゝ心を生じその友に向つて警戒した。彼はその周囲を見ず、たゞ主イエスを見て聖なる畏が起つたのである。これは悔改めし第一の徴である。

【二】 自己の罪を認め罪の罰を當然とした。

盗人は己が罪を認めて告白した。彼は神を畏れ己の罪を認めて假借するところなく己を審判した。罪の赦さるゝには、先づ、己が罪を認はすことと、キリストの贖罪の御功を信する事である。罪を認はすことと、赦罪を求むる事とは大差がある。多くの人はこの點に於てよく誤る故、罪の認はしについて三の肝要なる點を掲げてその異なる所を明かに仕様。

イ 神の性質に關し。

神の怒を挽回するには唯十字架のみで、我等は如何に謙り、如何に熱誠を盡しても、之によつて神の聖心を動かし、神に近き得ることは出来ない、然し神に向つて『赦し給へ』と祈るよりも、甘じて神の審判を受け之を承認し、ありのまゝ自己の罪を告白

して神のなし給ふまゝに自己を委ね奉ること。これは神の義たる性質に關して當然あるべきことである。

ロ キリストの犠牲に關し。

神が罪人に赦罪を與へ給ふ正當なる基礎はキリストの十字架である。罪惡は如何なるものでも贖なくしては赦されない。人が罪を悔改めたからとて、赦されず、又神が憐憫に動き給ふたからとて赦さるべきものでない。たゞ神が公義をもつ罪を赦し給ふ理由はキリストの十字架の贖の故である。

ハ 自己の罪惡を告白する。

罪を認はすことは、自己の罪に對して神の審判は當然なりと承認することである。然

して神の義しき審判をもて満足し、キリストの贖罪をもて満足するのである。十字架上の盗人は『我らは當然なり』と告白して神を崇め、キリストを崇め、己が罪の審判に満足を表したのである。

【三】 キリストの無罪を信じた。

『我らは爲し、事の報を受くるなれば當然なり。然れど此の人は何の不善をも爲さざりき』

(ルカ廿三〇四十一)

主イエスは何の罪もなきお方で、其の御苦難は我が罪の爲であると認はしたのであつて、彼は己が罪の身代りとなつて死の苦をなめ、世の罪を負ふ神の羔としてキリストを見た。

【四】 來るべきキリストの王國を信じた。

『また言ふ「イエスよ、御國に入り給ふとき、我を憶えたまへ」 (ルカ廿三〇四十二)』

彼は主イエスを眞のメシヤと信ずるとともに、必ず來るべきメシヤの國の王なることを認め、再び來りて王國を造り給ふ榮光の時を待望んだ。

【五】 キリストの救ひ給ふ事を信じた。

『また言ふ「イエスよ、御國に入り給ふとき、我を憶えたまへ」 (廿三〇四二)』

主イエスが救主であると信ずると共に、彼を救はんどの聖旨のあることを信じた。故に彼は己の罪を認はしたり又は赦し給へと祈ることもせず、『我を憶ひ給へ』と祈つた。彼は主の内に既に赦罪のあるを信じたのである。

【六】 大なる信仰。

マカロフ氏の言に『この盗人は天國に於て、使徒ポーロよりも榮あり、ポーロよりも

高き位と冠あるべし』といったが、事實主の弟子達は主の奇跡を見て信じ（ヨハネ二章）サマリヤの婦は主の證を聞いて信じ（ヨハネ四章）サマリヤ人は主の言を聞いて信じた（ヨハネ四〇四二）然るにこの盗人は主が全く棄てられ全く榮光を捨て給ひし時にキリストを信じた、彼の信仰は實に大いであつた。

三、主イエスの御取扱

『イエス言ひ給ふ「われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕にバラダイスに在るべし」』

（ルカ廿三〇四三）

【一】『われ誠に汝に告ぐ』

普通の約束の上に更に誓を加へしものであつて、彼をして斯る境遇にある時信ぜしむる爲に特に附け加へられし御言である。

【二】『今日』

彼は主が榮光の中に再び來り給ふ彼の日を望みて恩顧を懇願つたが、主は、彼の日と曰はず『今日』と曰ふた。數時間も経過せざる内に我と偕にバラダイスに在るべしと曰ふた。

【三】『なんぢ』

特に彼を指し、單數とし、二人稱を用ひて、彼自身の外に紛らふ事なき確實なる表示をなし給ふた。若もこの時『汝等』と云はれしならば漠然として確かに信する事が出來なかつたであらう。

【四】『バラダイスに在るべし』

盗人は今まで、曾つてアダム、エバがエデンにあつて神と偕に歩みし事を聞いてゐたであらう。主はパラダイスなる語にてこれを想起せしめ給ふた。

【五】『我 と 偕 に』

イエスと偕に往き得ると。今迄恐るべき奸悪と呪詛にみてる者の中にあり、且つ又彼自らも呪詛と奸悪にて満てる者なりしに、次の瞬間に主と偕に天のエデンの園にあるとは何たる恩寵か。ハレルヤ。

主イエスの個人的會談 終

昭和十年十二月五日印刷
昭和十年十二月十日發行

定價金參拾錢
送料四錢

不許複製

著作權者 日本傳道隊聖書學會出版部
兵庫縣明石郡垂水町鹽屋八十七
發行人 澤村 五郎
兵庫縣明石郡垂水町鹽屋八十七
印刷者 落田 健 二
兵庫縣明石郡垂水町鹽屋八十七
印刷所 日本傳道隊聖書學會出版部

發行所

兵庫縣明石郡垂水町鹽屋八十七
日本傳道隊聖書學會出版部
振替大阪七六〇八九番
(電話舞子四〇九番)

355
1166

終

